

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07269

研究課題名(和文) 社会変容期キューバにおける生の政治としての芸術音楽：新たな民族誌的研究の構築

研究課題名(英文) Art Music as Politics of Living in Contemporary Cuba: Toward a New Ethnographic Research

研究代表者

田中 理恵子 (TANAKA, Rieko)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：50779105

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「文化(音楽) = 民族 = 領土」という旧来の図式に当てはまらない、特異な「キューバ芸術音楽」を対象とした民族誌的研究である。とくに今日の社会変容期キューバにおける国際芸術音楽祭の実践に焦点を当て、音楽創造、観賞、政策などの行動様式がどのように変化するのか、その一端を明らかにした。この作業によって、旧来の音楽人類学および民族音楽学の分野においては未開社会の音楽を対象としてきたのに対し、本研究では今日の社会変容期を生き抜いていくための芸術音楽、すなわち生の政治としての音楽という新たな知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study is an ethnographic research focused on art music (“classical music”) in Cuba which does not apply to the traditional framework of “music (culture) = ethnicity = territory”. In particular, it focus on international music festival called “Cubadisco”, and explores a part of how behavioral modalities such as music creation, audience, and art policies change. Although traditional anthropology of music and ethnomusicology fundamentally focus on the primitive society's music or non-art music, this research clarifies that art music gain people's money, identity, and life even at today's social change period. Here, we obtain new knowledge of art music as politics of living.

研究分野：文化人類学

キーワード：芸術人類学 音楽 キューバ 民族誌的研究 生の政治

1. 研究開始当初の背景

(1) 導入：音楽人類学の新たな取り組みとして

申請者はこれまで、音楽を作品としてではなく、生成のプロセスとして捉えるアプローチを積み重ねてきた。ここでいう生成とは、事象の発生にまつわる文化的実践の総体のことを指し、既存のカテゴリーでは区別しきれないような状況をそのまま照射しようとする人類学的手法のことである(例として、田辺繁治編 2002『日常実践のエスノグラフィ』世界思想社)。本研究に引き寄せて言えば、「芸術」や「音楽」というカテゴリーをアприオリな前提とせず、これまでの芸術学とは異なる観点から、キューバ芸術音楽の発生に向けられた実践の総体を記述しようとする取り組みを指す。この意味で本研究は、音楽人類学および民族音楽学分野の新たな潮流に位置づけられる。

(2) 問題の所在：混淆の音楽を対象として

一方、本研究が対象とするキューバ芸術音楽 *música académica cubana* は、旧来の研究枠組みでは極めて捉えがたいことが分かる。まず、「芸術音楽」という枠組みは、未だ西欧中心主義的なまなざしが根強いいためか、非西欧のキューバ芸術音楽を周縁的に扱うのみであった。次に、「キューバ音楽」という概念は、土着的な音楽要素を重視する「音楽(文化) = 民族 = 領土」という図式を前提とするためか、西洋伝来の音楽でありながらアフリカ系の音楽的要素を内包し、ロシアの音楽教育法や北アメリカの作曲手法を深く取り入れたキューバ芸術音楽を捉えることが難しい。

このことを踏まえると、旧来の研究枠組みでは、キューバ芸術音楽に代表される混淆的な音楽の諸相はとりこぼされる傾向にあり、さらには、音楽をひとつの民族の固定的なシンボルとみなすような、ある種の封じこめが推し進められたという問題点が浮き彫りになる。近年の議論の中には音楽の多元性を重視した音楽人類学的なアプローチが現れているものの(例えば Born, Georgina and Hesmondhalgh, David, eds. *Western Music and Its Others: Difference, Representation, and Appropriation in Music*. Berkeley CA: University of California Press, 2000. など)、しかしながらこの課題に対する方策が積極的に示されてきたとは言いがたい。

(3) 課題への方策：「生きること」と「音楽すること」の生政治

では、この問題を超克するためにはどのような視座が有効だろうか。ここで音楽が人間の生に埋め込まれた実践であることを思い起こせば、先の課題への方策は「生きること *living*」の実践の場から音楽をとらえるアプローチを採用することにあると考えられる。

この手法は、未開社会の音楽を対象とした研究においては一定の成果が得られており(S・フェルド 1988『鳥になった少年—カリリ社会における音・神話・象徴』山田陽一ほか訳, 平凡社), また音楽の行為性に注目したアプローチや、音楽の批評や市場の影響を重視したネットワーク的音楽論などの近年の議論にも呼応するものだろう。さらに音楽研究という枠に限らず、人間の「生きること」がある環境のなかで文化社会を構築してゆく力を検討することは、今日の社会文化研究における先端的な課題となっている(例として T・インゴルド 2014『ラインズ: 線の文化史』, 工藤晋訳, 而立書房)。

申請者はこのような状況を念頭に置き、人々が生きる場で生起している事象の多元性を捉え、かつ、これまでの音楽研究で中核となっていた芸術・民族・民俗といった枠組みに囚われることのない「音楽の生成に向けられた実践の総体」という対象を措定した。そして大きな社会変化を迎えているキューバにおいて、モノ・カネ・ヒトの不足という困難を常に抱えながらも「音楽をすることは生きること」と語るキューバの人々の実践、すなわち生の政治としての芸術音楽の実践を精緻に検証することを目論んで、本研究を着想した。

2. 研究の目的

(1) ねらい

本研究は、「音楽(文化) = 民族 = 領土」の図式に当てはまらない特異なキューバの芸術音楽を対象として、とくに今日の社会変容期キューバにおける実践とその変容の諸相を明らかにしようとする民族誌的研究である。

(2) 焦点

計画遂行上のフォーカスは、ハバナで開催される大規模な国際音楽祭「キューバ・ディスコ *Cubadisco*」の諸側面において、新たな行動様式が醸成されてくるプロセスとその背景を実証的に考察することにある。国際音楽祭に関わる政策・鑑賞・創造といった三つのファクターを措定し、これらの相互行為的な実践のなかで「キューバ芸術音楽」がどのように形成(再形成)されるのか、その概念の生成プロセスを文献調査および現地調査によって明らかにすることを目指す。

| | |
|----|---|
| 政策 | 国際音楽祭に関する政策と現場での実践とのせめぎ合いを検証し、キューバ芸術音楽の概念がどのように捉えられていくのかを探る |
| 鑑賞 | 劇場での聴取経験を持つハバナの民衆に対して聞き取り調査を実施し、音楽家に対してどのような意識を持っているのかを探る |
| 創造 | リハーサルから演奏会までの一連のプロセスをすべて映像で記録し、音楽家の表現の選択とその実践の変化のプロセスを探る |

3. 研究の方法

本研究で行う作業は、質的観察とインタビューの手法を基軸とする。作業の内容は、文献資料類の精査と分析、調査先との折衝および第一次インタビュー調査、現地フィールドワークおよび第二次インタビュー調査(約3週間)、総括的民族誌の作成と成果還元、の四つに大別される。また、前掲「研究の目的」の(2)で述べた各焦点に沿って調査記録を作成し、国際音楽祭の現場での研究課題を抽出した上で、現地及び海外の音楽関係者らと共に民族誌の形式にまとめ上げることで総括を行う。その後、この民族誌を調査先および関係者に還元してフィードバックを実施することを以って全作業は終了する。調査地はハバナ市を拠点として隣接する次の3地区を調査重点地域とした。

| | |
|-----------|-------------------------|
| ベダード地区 | 音楽委員会, 芸術劇場, 芸術家協会, 住宅街 |
| セントロハバナ地区 | 小劇場, 集合住宅街 |
| プラーヤ地区 | 芸術大学, 住宅街(芸術家・音楽家の自宅) |

4. 研究成果

(1) 文献調査の成果

キューバ芸術音楽をめぐる研究枠組みにおいては、先行研究のレビューから、次の四つの問題を指摘することができる。

「非西洋」キューバでの芸術音楽の実践が周縁的に扱われてきたことは、「芸術音楽」の概念が、未だ西欧中心主義的な観点を有していることを示している。

「西欧」伝来の芸術音楽の実践がキューバ音楽の概念において捉えがたいことは、音楽概念の形成には真正性の基準が前提とされてきたことを示している。

キューバ芸術音楽の実践は、国際音楽祭をはじめ、国家イデオロギーの形成プロセスとして、旧社会主義体制下の画一的な芸術と見なされる恐れがある。

「白人」系世界を土台とするキューバ芸術音楽の実践は、キューバ研究において黒人系ルーツに注目してきた「アフロキューバ主義」や「クレオール」といった観点では光を当てることは難しい。

従って、キューバ芸術音楽の研究では、西欧/非西欧、民族音楽/芸術音楽、などの区別よりも、領域横断的な立場と民族誌的調査に基づいて、キューバ社会文化の新たなダイナミズムに焦点を当てること、音楽実践の場から音楽を捉えなおすこと、が求められるといえる。

(2) 民族誌的調査の成果

調査は原則的に質的観察のアプローチに属する次の二つの手法を採った。第一はフィールドワークであり、これは国際音楽祭が行われる国立劇場での参与調査とインタビュー調査の双方を融合した作業を念頭に置いたものである。尚、1日1リハーサル×5日間+公演当日といった一連の流れを、3クルー分(約3週間)映像で記録し、各日の終了後には1~3名の音楽家に対する質的インタビュー調査を実施した。第二は政策担当者・芸術家・聴衆に対する質的インタビュー調査であり、音楽実践の現場に身を置く関係者からの情報収集を目論んだ。

政策的ファクター：国際音楽祭に関する政策と現場での実践を検証した結果、キューバ芸術音楽の概念は、大衆/芸術といった区別よりも、むしろ「キューバにおいて行われること」が重視されることが明らかになった。

鑑賞的ファクター：劇場での聴取経験を持つハバナ在住の人びとに対して聞き取り調査を実施した結果、音楽・音楽家は尊敬や憧れの対象として、社会的に位置づけられていることが明らかになった。

創造的ファクター：リハーサルから演奏会までの一連のプロセスを映像で記録・分析した結果、音楽家の表現の選択は、きわめて流動的で柔軟に行われており、その変化のプロセスの一端が明らかとなった。

(3) 考察

国際音楽祭を例にキューバ芸術音楽の実践に目を向けると、社会的な事情と個々人の生がせめぎあう諸相が強く表れる。

例えば、頻繁に開催される各種国際フェスティバルは、経済問題を抱えるキューバに収益をもたらすことが可能である。音楽家たちにとってのそれは、社会的には、生活物資の支給・公演への対価支給をはじめとする様々な権利を受けることができるという側面を持つものの、より経験的には、楽器を弾いていた手が分厚い札束を受け取ること、生肉の内臓や血に出会うことなく包装されたスーパーの冷凍肉の冷たさに触れること、あるいは即座にレストランのフォークとナイフを取る手に変わること、といった身体的経験の変化として現れる。また人々は、フェスティバル会場から観光客が去った後には、劇場の外壁が新しく塗り替えられることを目にし、子供を持つ母親たちは、「そろそろコーラスかバレエか習わせないと」といった言葉を交わす。

このような状況から、ハバナにおける「芸術音楽」の実践は、生きるための手段として認識されていること、政策・鑑賞・創造それぞれのファクターからの眼差しが交差する

対象としてあること、そのように形成されるキューバ音楽が社会全体に強い影響を与え、などが示された。

社会変容期キューバにおける芸術音楽の実践は、収入を得る手段であり、アイデンティティと不可分にある実践であり、人びとがハバナを生きることの表明でもある。これを踏まえて本研究では、生の政治としての芸術音楽、という新たな知見を得ることが可能となった。なお、米玖国交正常化の動きやフィデル・カストロ前議長の死去などが続いた時期に、本研究を実施した意義も大きかったことを付記しておく。

(4) 調査後のフィードバックについて

本研究は、その計画時に調査対象および関係者に研究のフィードバックを図ると同時に、調査対象を国際ネットワーク化する企画を目論むことを盛り込んだ。この点に関しては、2017年9月からキューバ人芸術家と連携した複数のプロジェクトに参加し、キューバ人音楽家のホームページを複数言語で開設する事業や、世界各地の芸術家にキューバ芸術研究を発信する作業を共同で行い、本研究を通じた国際ネットワークの形成に取り組んでいる。またこれらの活動は2018年4月以降も長期的に行われる計画であり、本研究の成果を幅広く国際社会に投げかける契機として、今後も継続する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1. Rieko Tanaka. "Shared experience": a case study from the practice of "classical music" in Cuba. 『学術研究』(人文科学・社会科学編), 66, pp.253-364, 2018.3.
2. Rieko Tanaka. Between Art and Anthropology: The Emergence of "Border" in the Musical Communication. *Journal of Tokyo ZOKEI University*, 19, pp.153-171, 2018.3.
3. 田中 理恵子. 音楽における「出来事」— ハバナの *La Fiesta* にみる「愉しみ」の研究. 『嗜好品文化研究会平成26年度嗜好品文化論集』, pp.1-18, 2017.3.
4. Rieko Tanaka. An Introduction for a Theory of Internal Experience of Music: Through Cross-Genre Performances of Cuban Musicians. *Journal of Saitama Institute of Technology*, 15, pp.55-66, 2017.3.
5. Rieko Tanaka. Las experiencias del sonido: la visión de los músicos experimentales sobre la música folclórica en la sociedad moderna. *methaodos.revista de ciencias sociales*, 4(2), pp. 291-302, 2016.11.

[学会発表](計2件)

1. Rieko Tanaka. "Continuity of Experience" in musical performance in Cuba. International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES), Inter-Congress, Ottawa University (at Ottawa), 2017.7.
2. 田中理恵子, 浜邦彦, 橋本みゆき. 桜本 SAKURAMOTO: 「多民族」「多文化」を生きる路上の文化. カルチュラル・タイフーン2017 (日本カルチュラル・スタディーズ学会大会), 早稲田大学(早稲田), 2017.6.

[図書](計0件)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 理恵子 (TANAKA, Rieko)
早稲田大学・教育・総合科学芸術院・助手
研究者番号: 50779105

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし